

田中信幸さん講演『父の戦争責任をいっしょに背負う』

<自己紹介>

みなさんこんにちは みなさんにお会いできて本当にうれしいです。

ここに来ることになったのは、司会をされております事務局の方から繰り返し働きかけがありまして実現しました。いろいろありがとうございました。

さて、本日私がお話ししますのは、武藤家（私の結婚する前の姓は武藤です）で親子で行なった戦争をめぐる対話ですが、これは、どうにかして親子の間で「あの戦争は間違った戦争だった、侵略戦争だった」ということを何とか確認したいという、その当時の私の問題意識でやったことであって、私がこんなところに来て、今こうして話をするということはまったく想像もしていませんでした。それを約 10 年続けて、私も子どもが出来たりして、家にも孫の顔を見せに帰るとい時代にもなりましたから、この辺で整理しようと、親父といろいろ話したところ、「あんたの戦争責任は俺も一緒に背負っていく」と言ったら、親父が「ウン」と言ってくれたので、一応そこで親子の間で了解ができたと思っています。

1995 年というのは戦後 50 年ですが、その年に父親が私に日記を渡しました。何だろうと思ったら、日記です。始めて日記を見まして、書かれていることのいくつかは既に父親から聞いたことですので、そんなに驚きはしませんでした。やはり慰安所に行ったことなどが詳しく書かれているので、衝撃でした。そして翌年、今度は黒い鞆を渡すので何だろうと思ったら、親父宛の、主に 1938（昭和 13）年から 1946（21）年にかけての手紙類でした。これらを便箋、封筒をきちんと整理してあったのです。300 通以上ありました。その中には、戦場の兵士からの手紙、戦死した戦友の家族からの手紙、あるいは友人や我が家の爺さんたちから戦場の親父に宛てた手紙などいろんなものがありました。それらをこの間、何とか読み解いてきました。

もちろん親父が戦場での出来事全てを見ているわけではないし、当時の日本兵がそれぞれ何をやるのかということとは上からの命令に従ってやったということですから、きちんとした報告もないし、個人個人が関わったことを、その限りで記録として日記に残すということに過ぎません。親父の場合は、日中戦争に関しては約 1 年間の日記がありますので、それを中心にして今日は話をし、じゃあ「親父の戦争責任をいっしょに背負う」という生き方というのはどういう生き方なのかということ、実際私がこの間やってきたことをお話しするしかないと思っています。そして今後私達がこのウクライナで戦争が始まり、日本の防衛費が 5 年間で 43 兆円、GDP2 %に倍増するということが、何のためらいもなくメディアによって伝えられるという、この恐ろしい時代に、どうしてこの過去の日本の誤った戦争の教訓を後世にどう伝えていくのかということについても私なりの考えを述べたいと思います。

1. 武藤秋一の軍歴

私は、1951 年生まれの 71 歳で、父親は 1915 年（大正 4 年）生まれで 2006 年に 91 歳でなくなりました。大正のこの時代に生まれた世代は、3 回出征している人が結構多いのです。

まず、軍歴ですが、父親は1936年1月10日に熊本第6師団歩兵13連隊に入隊します。そして兵営での訓練を終えて、ご存じのように37年7月7日に盧溝橋事件が起きますから、7月20日には、広島第5師団、熊本第6師団、姫路第10師団の3個師団動員が決定され、7月27日には動員命令がかかりました。親父『武藤秋一（あきいち）日記』はこの日から始まります。

この時はまだ南京攻略戦ではなく、やがて満州から中国全土に侵略戦争を拓げていくことになるのですが、まずは北支事変というもので、河北省での作戦への動員でした。父秋一は歩兵第13連隊第3大隊第9中隊第3小隊第2分隊長で13名の部下を率いるという立場でした。8月2日に門司港を出て、12日に天津に着きます。ここで日本租界の入口にある金鋼橋の警備に当たりました。その後9月14日から河北省での作戦に参加し、その後、突然第6師団は、第10軍に編成されて天津に戻り、そこから船に乗って、11月5日に海上からの杭州湾上陸作戦に参加し、南京攻略戦に突き進みました。

ただ、親父がほかの兵士と違うところは、熊本の第13連隊と大分第47連隊を統括する第11旅団長坂井徳太郎に非常に気に入られたみたいで、南京が陥落する13日の午後は、西門(中華門内にある西門か?)から衛兵として一緒に登って南京城内を見るという経験をしています。親父達の第3大隊はその日、13日、14日というのは、城内掃蕩をやって「徹底して中国兵を殲滅する」ということをやっているのですが、親父は、14日の午後もまた、坂井徳太郎旅団長のお供をして城内を見て回っています。そして16日には、60キロほど離れた安徽省の蕪湖に行って、そこで約4ヶ月間警備につきます。そこで徴発するなど、いろんなことをやっています。

その後、2月に入って蕪湖に「慰安所」ができます。憲兵隊の報告では、2月10日にまだ「慰安婦」が23人だったのが、2月の20日は108人にまで増えています。そこで、親父は2月21日と3月12日に「慰安所」に行き、その時のことが日記に詳しく出ています。実はこのことを2010年に韓国のMBCテレビの撮影で、「父の日記」というタイトルで話すことになり、またそこで金福童(キム・ボクドン)さん、吉元玉(キル・ウォノク)さんお二人とガチンコ対談をしました。厳しかったです。

親父は4月末まで蕪湖にいた後、徐州作戦が取り組まれ、南からの援護ということで、揚子江を渡って、左岸から戦闘を続けていくのですが、6月11日、大別山系舒城梅心駅付近の戦闘で、中国軍の手投げ弾によって大きくお尻がえぐられる右足大腿部貫通銃創を負い、野戦病院に行くのですが、傷がひどくて、野戦病院では対応できないということで内地に送られることになり、小倉陸軍病院から最終的には熊本の陸軍病院に転院し、11月4日に退院しました。

親父が陸軍病院に来てから、次の出征までが親父の一番の青春時代みたいで、「名誉の負傷」で英雄扱い、いろんな人が慰問に来るのです。とりわけ熊本にある第一高女の女学生3人から手紙がきています。その中のお一人は父親にぞっこんで周りみんな秋一さんは彼女と結婚するのではないかと知っているという手紙もあります。そして40年4月29日には金鵝勲章をもらっています。たいした「手柄を立てた」わけでもないのに、意味がわかりませんが、この金鵝勲章は南京の民間博物館に寄贈しました。

二度目の出征が41年7月16日になるのですが、この間我が家的には、爺さんつまり秋一の父が70歳を過ぎておましてほとんど力仕事はままならない、婆さんの方はリュウマチでほとんど寝たきりでしたので、働き手の秋一が兵隊にとられるというのは、我が家的には農業が出来なくなるということだったので、縁談が持ち上がり、母トミ子との結婚が決まって、母は菊池(隈府町)のお金持ちの家いわゆる「見習い」として行って奉公しております。その時の、母から父への手紙のやりとりも4通残っています。二度目の招集の連絡が来たので、出征一週間前に慌てて結婚式を挙げて、母は家に来て、それ以降、年老いた親たちを助けて農作業をやり、家を支えてきました。

二度目が内蒙古海拉爾(ハイラル)で、ノモンハン事件で敗北した後で、国境警備につき、塹壕訓練をしております。この時、日記ではなくて「徒然(つれづれ)の記」というタイトルの冊子を書き上げて持ち帰ったといえます。その一部が残っていましたが、家族がいうには今はどこにいったかわからない、ということで見つけ出せません。ハイラルで召集解除になったのが43年の4月22日です。

そして1年経ったと思ったら、もう44年になりますが、8月28日に臨時招集で工兵第6連隊補充兵に入ります。何の訓練もなしに広島の子品に集められて、陸軍はモーターボートに爆弾を積んで体当たりする「マルレ」というのがありますが、その陸軍海上挺進戦隊を後方支援する海上挺進基地第8大隊に編入になり、急遽輸送船に乗せられて、門司を経由して台湾の高雄に行きます。そして44年の秋というと、ほぼバシー海峡とかの制海権制空権はアメリカに奪われていましたから、船団5隻で行くのですが、親父は第1隻目に乗るはずだったのが、何かの手違いで5隻目に乗ることになりました。そうすると前の4隻は米軍の魚雷でやられ、親父の乗った1隻だけがフィリピンに着きました。だからここでもたくさんの兵士が亡くなっています。日本軍はその人達にいっさい補償しません。フィリピンの山の中をずっと逃げて回って、4月28日には、米軍の砲弾が炸裂して、その破片で顔面がひどくやられたのですが、軍医と衛生兵のちょっとした治療を受けただけで、その間に部隊は先に行ってしまうて、取り残され棄てられたかっこうになってしまいました。そうしたら、その先に行った部隊は全滅してしまった。結局そういうなかで敗戦を知ったのが9月4日頃だといえます。そして9月8日米軍に投降し、1年後に復員しました。

2, 父の日中戦争時の従軍日誌に書かれていること

それで「日記」にどんなことが書いてあったかという、先ほど述べましたが、8月2日に門司港を出て、12日に天津に着き、日本租界の入口の金鋼橋で任務に就きます。この時、于文彪(ユイブンピョウ)という日本語の出来る中国青年と友達になります。この中国人の「朋友」とずいぶん話をしていてこの于さんの紹介でカフェに行って、王(ワン)さんという女性と知り合いになっています。そしてこの于文彪さん王さんとの写真が親父の「支那事変出征記念アルバム」に貼ってあって、「中国の朋友于文彪くん」「金鋼橋〇〇のクィーン王さん」と書きこんで戦後まで大切に取っていました。ところが、こうして中国人の友達が出来たと喜んでいた父に対して、軍は何をさせたかという、いきなり次

のような事が起きます。

9月2日の日記です。

「起床後、簡単な体操があった。同日便衣隊首切りに行く。川陽（徳鎮駅の東方）に於いて切る。沼田少尉が刀で切った。わが分隊は皆一剣ずつ突いた。」親父は分隊長ですから真っ先に突き刺したようです。「金鋼橋で下士哨の任務についた。1小隊は1, 4, 23が交代した。昨夜ターホトンで日本人が狙撃され逃げて帰ったが、便衣隊の居所は分からなかった。ターホトンの民家を搜索した」。

また、この時の状況を、同じ歩兵13連隊の兵士が別の資料で次のように書いています（1979年 創価学会青年部反戦出版委員会編『揚子江が哭いている 熊本第六師団大陸出兵の記録』所収「池を埋め尽くした死体の山」真田一介）。引用します。

…天津の警備に就いた。…この警備に就いている時に、多くの捕虜を殺した。上官からの命令で、「肝試しに殺（や）ってみろ」といわれると、いわれた通りにするしかない。手足を縛り、身動きできなくした捕虜を皆が銃剣で突き刺し、腹わたの奥深くえぐるのである。急所をはずれ、断末魔の叫びをあげてのたうちまわる者、われわれをにらみつけたまま息たえる者、流れる血、噴き出る臓物、うめき声に満ちた処刑現場は、まさに地獄絵図であった。その時に私は、この中国に戦争にきたのだという事実、もう退くことはできないとの思いをもった

小さいときから父から何度も聞きましたが、「もう何が何だかわからなくなって、飯が喉を通らなかった」と話していました。だから、この日記を書いた9月2日から天津を出発する前日の9日まで1週間日記がないのです。書けないのです。

9日の日記です。

「1日おきの衛兵の服務。金鋼橋の下士哨をした。（熊本の）実家から便りがあった。親友のSからも手紙が来た。本当に嬉しかった。いよいよ明日（10日）第一線に向かって出発する。ここを去るに当たって、思い出すのは朋友になった親友のユイのことと王（ワン）のことだけである。これは内緒だけれど、他の者は笑うかもしれないけれど、たとえどんな奴だって、いつ可愛い僕の（オデ）タイタイは本当に可愛いくてならない。もし俺に自由の日が来たら、必ず迎えに来ようと思う。馬鹿、馬鹿そんな事ない。死に行く身にうそだうそだ。憧れの第一線へ、1時間でも早く行きたくてたまらない。滞在の間に便衣隊2名を切る。」

このユイさんとワンさんの二人との出会いは親父にとって相当気が合ったようで、同じ中国人を一方で刺すわけですから、その葛藤で親父は「もう頭がぐちゃぐちゃになった」と言っておりました。

しかし、1週間経つと「俺も中国兵を殺しに行くんだ」と先ほどの兵隊の方と同じような思いをもつようになっていきます。この天津の警備は親父にとって葛藤の連続だったと思います。

その後、河北省の戦闘に行き、永定河渡河戦・大清河渡河戦・千坊河渡河戦・小公村野戦、保定会戦、国瓦カク荘掃蕩戦、小巢戦闘に参加します。これも父親はそんなに詳しくは書いてないのですが、同じ部隊の別の資料で紹介します（『揚子江が…』米田長俊）。保定城会戦でたくさんの中国人を捕虜にして虐殺しています。

わが中隊は、そこで160人ぐらいの敵兵を捕虜にした。間もなく、小隊長から「捕虜全員を、三八式歩兵銃で殺せ」との命令が下った。その命令を聞くと、みんな「いっちょやってみるか」という気持ちになった。これは、歩兵銃の威力を知るための試し撃ちだったのである。円陣を作り、その中で、捕虜同士、背中と胸をぴたっとつけた状態で15、6人並ばせて、一番前の捕虜の胸に銃口を当てて撃つのである。ズドンという銃声とともに、7、8人の捕虜が、胸をぶち抜かれ、バタバタと倒れていった。そしてだれかれとなく「こんどは俺がやる」「いや、俺がやる」というようにして、試し撃ちが始まった。約10人の戦友が、実際に銃をぶっぱなした。皆、殺気だっているのだから、一人がやると、別の者が、「もうお前の銃の威力は試したろうが、こんどは俺の番だ」と、どれも同じ銃なのに、勢い込んで、自分の銃の威力を試そうとするのだった。そのたびに、まわりで見ている戦友は、「やっぱり、三八式はすごかなあ。俺のも、あのくらいすごいかなあ」という、驚きの声をあげていた。

この保定城の虐殺は、中国側の資料では、大量の一般民衆が含まれていたようです。中共保定市委党史研究室 編著 《歴史の鉄証》第六卷（長征出版社）から補足して引用します（木野村仮訳）。

9月23日、日本軍は保定城の攻撃を開始してきた。24日、西門を爆破して攻め入り、保定を陥落させた。日本軍の入城後、なりふり構わず罪のない民衆を虐殺し、家々を放火し、強姦、略奪は所構わず行われた。北関においては、日本軍は逃げ遅れた市民500余名を閉じ込め、北関城附近に集め、機関銃を掃射し、一人として逃れられた者はいなかった。東大街では、日本軍は消火にあたっていた民衆を包囲し、銃剣で24人を突き殺した。当時全市街区到る処に地にまみれた屍体があふれ、家々は破壊された。不完全な統計によっても、市街区で戦火に遭った家は千カ所以上になり、民衆の死亡者は2000名以上にのぼる。

もう人殺しをしているという感覚ではないのですね。こういう心境は、実際私達には分かりませんが、今のウクライナでも同じようなことが起きているのでしょうか。

そうして石家荘まで行くのですが、そこで突然転進命令が出て、汽車に乗って北京から盧溝橋の横を通って天津まで行って、そこから船に乗って、11月5日（『秋一日記』ではなぜか日にちがずれて4日となっている）、杭州湾上陸作戦に参加します。ここから南京攻略戦に向かいます。

大きい船から小船に乗り換えて「船底がつかえる」ところまで行って、飛び降りた。

『秋一日記』では、「海上は深い霧で、何という我が軍の幸運であろうか。…敵前上陸、至難とされた上陸も折からの天候と、敵の手薄の為に難しくないようだ。」と書いていま

す。

この杭州湾に上陸したあと、上海の激しい戦闘で逃げる中国軍を、第6師団は側面から挟み撃ちにして大虐殺をしました。

11月7日の『秋一日記』には、「敵は100（名）くらい居て、相当交戦した。（敵は）三百余りの死体を遺棄して去った。飛行機の爆撃」と書いています。

『熊本兵団戦史』（1965年 熊本日日新聞社発行）によると、「歩兵第13連隊第3大隊（親父達の部隊です）は左先遣隊となる。…左先遣隊は6日夜半金山南方の渡河点に達して、7日渡河。金山南方で約千人の中国軍を包囲殲滅。」そして9日には「上海方面から青浦に向かって退却中の中国軍を迎え撃ち、大量虐殺した。…この方面の敵の遺棄死体は二千あるか、四千あるか、数えきれぬものではなかった」。

また、ある第13連隊兵士は次のように書いています（『揚子江が…』坂本高）。

「崑山へとつづく道筋で、すさまじい光景に出くわした。右手は山、左手は畑、そして点在するクリーク。その道筋をおびたらしい中国人の死体が数百メートルにわたって、埋め尽くしていたのである。何十台という車輛も破壊されたままに、車の中にも、道路にも、そして山側にも畑の中にも、数千人にのぼると思われる死体の山である。中国正規兵の服装が大半だったが、民間人の服を着た苦力らしい者たちの姿も数知れずあった。」

こうして逃げてくる中国軍に対して、飛行機の爆撃も加えて、ものすごい数の中国兵を虐殺しています。『秋一日記』11日には「途中敵の自動車が2百台余り置き去りにしてあった。空爆の威力によって相当打撃を受けたらしい」と書いております。13日には「鉄道を逃げてくる敗残兵を皆殺しにする。□ており、打ち殺したのは77にのぼり、先□だった。」そのあとクリークなどで一昼夜激しい戦闘をやったと書いております。

そして、もともと上海戦のために編成された日本軍でしたが、第一線が独断で司令線を見捨て南京への進撃をはじめ、中支那方面軍も南京攻略を意見具申します。南京攻略戦に反対する指導部があったものの、松井石根上海派遣軍司令官や武藤章参謀副長はとくに積極的で、ついに12月1日には、南京攻略の大命が出されました。天皇命令です。このあと、中支那方面軍と第10軍との間で、南京をどう攻めるかが、『秋一日記』12月4日頃に簡単な地図が出てきますので、そのころには現場の兵士たちにも伝わっていたようです。

第6師団は中華門を攻略します。地図を見てください。6D45i、6D23i、6D47i、6D13i（D：師団、i：連隊）とありますが、南から攻めていった部隊です。この中華門攻撃が一番苦労したようです。この後、第23連隊は水西門を攻撃しています。第13連隊が中華門に登ったのが、13日午前1時5分です。『秋一日記』には「0時半頃城門の方に於いて、万歳の声を聞く。爆破が出来たらしい。」とあります。親父は待機部隊でした。第47連隊は12日の昼頃に「城壁を占領」と報告しています。しかし、激戦です。第13連隊が12日夜襲をかけます。中華門は手堅いので、砲兵隊が相当大砲の弾を撃ち込んだようですが、なかなか落ちず、工兵隊が作った高い竹ハシゴをつなぎ合わせて、それを使って城壁を登っている写真が『熊本兵団戦史』には残っています。そうして城壁にたどりつき、その後、13日の午後から14日にかけて、親父達の第3大隊は城内掃蕩を徹底してやりました。そし

て、第6師団の城内掃蕩の区割が決められているにもかかわらず、それに構わず、部隊は北端の下関（シャーガン）まで行っています。

第13連隊兵士の赤星義雄は次のように書いています（『揚子江が…』から引用）。彼は揚子江岸まで進み、重砲陣地のある獅子山に登りました。少し長いが引用します。

その砲台から眼下を流れる揚子江を見ると、おびただしい木の棒のようなものが、流れているのが遠望された。私たちは獅子山から降りて、揚子江岸へと向かって行った。途中、中国軍兵士の死体が転がり、頭がないものや、上半身だけしかないものなど、攻撃のすさまじさを物語っていた。揚子江岸は普通の波止場同様、船の発着場であったが、そこに立って揚子江の流れを見た時、何と、信じられないような光景が広がっていた。二千メートル、いやもっと広がったであろうか、その広い川幅いっぱい、数え切れないほどの死体が浮遊していたのだ。川の岸にも、そして川の中にも。それは兵士ではなく、民間人の死体であった。大人も子供も、男も女も、まるで川全体に浮かべた「イカダ」のように、ゆっくりと流れている。上流に目を移しても、死体の「山」はつづいていた。それは果てしなくつづいているように見えた。少なくみても五万人以上、そして、そのほとんどが民間人の死体であり、まさに、揚子江は「屍の河」と化していたのだ。

各部隊の動きはまた後に述べますが、では親父は何をやっていたのか。13日には旅団長といっしょに西門から城壁上に上り、城内を見渡しています。親父は日記に南京の地図を書いて、自分の回ったところを赤鉛筆で書いておりますが、14日の日記には次のように書いています。

「警戒兵（午後）2時交代。それより旅団長閣下の護衛をして南京市見学。別図の通り歩き回った。南京大街を過ぎて国民政府を見に行った。途中至る処で火災を起こしている。途中公共防空壕が一区に必ず一つは掘ってある。支那兵の死体がおびただしい。大きい建物はたいてい銀行に劇場だ。中央大劇場、同じく舞踏場。銀行は中国銀行、中国農民銀行等を始め十幾つある。国民政府に來た。集団司令部より歩哨を立てて出入りを禁じている。しかし、旅団長閣下のお声掛かりで、入ってみる。最後の松八閣〔松風閣？〕という大きな建物に來た。ここは国家の最高議事堂だ。蒋介石のいた部屋に來て椅子に腰を下ろしたり、寝台に寝たりしてみた。支那の国家の元首のいた椅子に腰を下ろすことが出来た瞬間の満足は得も言われなかった。松風閣の字と文鎮を持ってきた。次に明時代の宮殿を見に行った。その装飾の綺麗さに目を奪われた。飛行場を右に見て帰る。夜はゼンザイに舌鼓を打った。」

14日も同僚が城内掃蕩をやっている間に、親父は旅団長のお共で南京城内を見て回っています。私は、2017年の12月12日か13日に通訳の方と二人で親父の辿ったコースを見て回りました。その時最後に、この蒋介石の執務室というのが再現されていて、そこに行きました。あれが親父の座った椅子だ、寝台だと思えば、80年後に、侵略した軍人だった父と父の戦争責任を問う私が同じ場所にいるということが、何だか感慨深い思いがしました。この時、父は文鎮を持って帰ったと言っています。実は、家の者はこの文鎮

を見ていると言っていますが、その後見つかりません。私の従兄弟がいうには「あまり高そうな文鎮じゃなかったぞ」というのですが、親父が活着しているうちにその文鎮の在処を聞いておけばよかったのですが、つい聞きそびれている内に亡くなりました。出てこないというのをみると、多分、戦後、蒋介石は戦勝国中華民国総統ですから、そこから盗んできたとなると戦犯に問われるのではないかと相当心配してどこかに処分したのではないかと思います。

第6師団が南京に滞在した期間は短く、16日には、第一陣として第13連隊が蕪湖に立って、それから五月雨的に他の連隊も次々と南京を離れることとなりますが、その間にいろいろなひどいことをしています。

「第6師団各連隊の虐殺を示す資料」を『第六師団と軍都熊本』からまとめてみました。

<歩兵23連隊（都城）>

・第二大隊砲小隊長折田護の日記「12月16日晴 聞くところによれば本日約1,000名の俘虜を得、これをカンチュウ門外にて全部銃殺または斬殺せる由にて之等は全部地下室にかくれ居たるものなりと、まさにおどろくほかなし。」

・23連隊（部隊不明）上等兵宇和田弥一の日記（1984年朝日新聞）「12月15日今日、逃げ場を失ったチャンコロ（ママ）約200名ぞろぞろ白旗を掲げて降参する一隊に会ふ。老若取り混ぜ、服装万別、武器も何も捨ててしまつて大道に蜿々ヒザマツイた有様はまさに天下の奇観との云え様。処置無きままに、それぞれいろいろの方法で殺してしまったらしい。近ごろ徒然なるままに罪もない支那人を掴まえてきては生きたまま土葬にしたり、火の中に突き込んだり木片で叩き殺したり、全く支那兵も顔負けするような惨殺を敢えて喜んでいるのが流行し出した様子」

<歩兵45連隊（鹿児島）>

・45連隊は城内に入らず、南京城の城西部を揚子江右岸沿いに攻め込み江東門から下関に進出して中国軍の退路を遮断する任務を与えられた。45連隊は南京城内には入っていないものの、南京城外西側地域の戦闘、あるいはこの地域での虐殺や強姦・略奪などは16師団に担当が代わる15日頃までの間この部隊が行ったものと言える。

・下関は45連隊第二大隊の担当区域であり江東門も担当していた。潰走する中国兵が下関で集められ、山本隼人太尉の訓示を受けた後に解放された。山本太尉は、日本兵には珍しいことだが、降参して出てきた中国兵に向かって「我々は蒋介石は絶対に許さないが、お前等はただの百姓だ。だからお前たちは武器を棄てて早く郷里に帰れ」と言ったという。しかし、その集団が喜んで白旗を掲げながら江東門まで来たとき、再び逮捕され銃剣と軍刀で虐殺されるという悲劇的な事件が起きた。それは中国側にもその経験者がおり、第八七師の劉四海二等兵はこう証言した。江東門まで来たとき中国兵達は白旗を見せて「投降して釈放されたものです」と言った。ところが日本兵（同じ45連隊所属）は無言で銃剣と軍刀で襲いかかってきたと証言。その他騎兵六連隊の牧野信人の日記には「12月14日 村上少尉ト斥候トナル（約3百名捕領ス、全部殺ス）」とある。

<歩兵47連隊（大分）>

・47連隊は全ての部隊が13日からのシカンセン（四眼井）高地の占領と周辺の城内掃討に関係していた。第二大隊は国際安全区域内にある五台山までの掃討を行っている。第二大隊陣中日誌には「一三・〇〇ヨリ南京城南部区域ノ掃討ヲナシ、敗残兵五名ヲ刺殺シー七・〇〇終了」と書かれている。

・中国側の『侵華日軍南京大屠殺暴行日誌』には14日五台山で8名の民間人が日軍に殺害されたとその氏名が記されている。五台山を掃討したのは47連隊が中心であったので、そのほとんどが47連隊関係の虐殺であったといえる。

<歩兵13連隊（熊本）>

・秋一が所属する第三大隊は12日の攻撃時は予備隊として、城門外で控えていたが、13日午後から中華門から入場し中正路南端までの掃討を行い、夕刻には青涼山・五台山を占領している。だが、そこに止まらず、下関まで行っている。

（秋一は旅団長の衛兵で別行動）ただ、さきほどの『揚子江が…』の証言以外に、第三大隊の城内掃討に関する詳しい資料は見つかっていない。

もひとつ、蕪湖に向かう途中の虐殺です。

秦郁彦『南京事件』増補版によると、16日蕪湖へ向かう途中、第13連隊が捉えた「一千名以上の敗残兵」（荻野昌之太尉手記）を中華門外で集団射殺している。その状況については児玉房弘上等兵（第二大隊機関銃中隊）の証言がある（毎日新聞1984年8月15日記事参照）。児玉らに揚子江近くの小高い丘に機関銃据え付けの命令が下った。すると麓の窪地に同連隊が連れてきた多数の中国兵に対して「撃て」の命令。機関銃を一斉に乱射。「血しぶきが上がった」と書いています。

これに関しては、偕行社が1989年に発行した『南京戦史資料集』の「戦史研究ノート」の部（758、9頁）では、「18日朝、第六師団より中支那方面軍司令部に電話があり、下関に支那人（ママ）約12～13万人が居るがどうするか」とあり、長勇参謀が『ヤッチマエ』と命令。事の重大さに約1時間経って再度第六師団から電話で問い合わせがあったが、長参謀は同じように伝えた」ということが掲載されている。

このことは2001年に結成した「教科書ネットくまもと」の初代代表として活躍された元教師の岡崎和三さん（2010年没）からお聞きしました。岡崎さんは戦時中陸軍士官学校を卒業された職業軍人であり、戦後も士官学校卒業生の集まりである「偕行社」が発行した機関紙『偕行』を購読されていました。私も岡崎さんからその資料集を借りて初めて知りました。

これは、16日の事態と重なるのだらうと思います。ただ、これは相当激しい銃撃で殺していますので、歩兵部隊が移動していくときの位置関係が分からず、『秋一日記』にそのことが一切記されていないのはなぜか不明です。これに付いては23連隊のところで紹介した折田護日記の12月16日の記述とも重なります。折田日記では「漢中門外」と記されています。

その後、父は蕪湖に行きまして、そこで4ヶ月ほど警備をやります。蕪湖に行って、ここで始めて徴発が出てきます。徴発に関しては、上海派遣軍はまったく食糧を持ってきて

いせんから、徴発をむちゃくちゃやっていますが、第 10 軍の方はわりと兵站があったので徴発は南京までの間にそんなに出不来なのですが、父は、蕪湖に行ってから、4 ヶ月の間に 2 回、そして、そこから揚子江左岸に渡って、また 2 回やっています。敵兵の捜索で集落への放火、敵兵を追っかけていったけれどもとうとう見つからなかったのが、帰りにその集落に火を付けて帰る、というのが何回かあります。徴発について父に尋ねた事がありました。父は「略奪ではない、金は払った」と答えましたが、それは信用できません。

ここで特筆すべきは、2 月の初めに慰安所に 2 回行っていることが『秋一日記』に出てくることです。

2月21日

今日は楽しい外出日だ。石川（父の一番の戦友です）と二人、まず朝鮮征伐に行く。第 4 番乗りだった。TOMIKO（とみこ。母の名前と同じなのでなんか嫌なのですが）慶尚南道出身。次は支那征伐に行く。第一番乗りだった。そして最後に、かつて二十時代の恋人八重ちゃんそっくりの、懐かしい竹の 7 号智恵子さんを訪ねた。そして多少のいざござは起こしたが、結局とり得ず帰った。智恵ちゃんは泣くし、本当に可愛そうだった。明日より石碓鎮付近の警備に行く。

3月12日

外出の楽しい日だ。まず大田黒、石川と三人して、慰安所に行った。日本、支那、朝鮮を征伐して帰る。オデン屋でうんと酒を飲んで酔っ払った。別に異常なし。

2月21日の「いざござ」について親父に聞いたら、日本兵達は日本人「慰安婦」に列を作って待つわけですが、そこで知恵ちゃんと居たときに、順番を待つ兵士がドアを靴でドンドン蹴ったのでケンカになったとかいうつまらないいざござのようです。

当時、下記(註)のように、蕪湖では日本人の「慰安婦」たちが急に増えて109名となったという資料が発掘されています（1938年2. 20資料：蕪湖「内地人48、鮮人36、支那人25」（註）。

・大阪大学藤目ゆき教授が代表を務めるアジア現代女性史研究会から『アジア現代女性史 2020 第 14 号』が発刊された。その中に李青凌（リ・チンリン）という上海師範大学「慰安婦」問題研究チームの研究者が発表した論文「中国におけるあらたな「慰安婦」資料の発掘」。

・『鉄証如山：吉林省新発掘日本侵華檔案研究』（檔案＝公文書という意味）という本に 1953 年旧日本軍憲兵隊司令部跡地の建設工事で、土に埋められていた膨大な資料が発見され、その中に南京の憲兵隊から満州の憲兵隊に送られた慰安所の状況を示す資料が多数出てきた。2月10日と20日の資料です。父が通った 2月21日の1日前の慰安所の事実を裏

付ける証拠書類が出ています。

地名	駐屯兵の概数	慰安婦の数	慰安婦一人に対する兵員数	摘要
南京	25,000	141	178	上記の他芸者17名
下関	1,200	17	71	従来6名の処2月20日11名増員
句容				今だ慰安所の設備なし
鎮江		109	137	慰安所利用人員：将兵8,929名
金壇		9	133	
常州		46	140	
丹陽		6	267	不足の為、慰安婦女を現地に募集中
蕪湖		<u>109</u>		<u>内地人48、鮮人36、支那人25</u>
寧国				交通途絶のため不明

いやな資料ですが、父親の話と一致します。今頃になってこんな資料が出てきたことに驚きました。資料の発掘に感謝しかありません。ありがたいことです。『秋一日記』自体は、韓国の独立記念館に寄贈し、レプリカは韓国の「戦争と女性の人権博物館」に展示されています。。

さて、第13連隊は、4月24日に蕪湖を出発して、船で揚子江を下り、対岸の和県に上陸します。これは徐州作戦を援護して、最終的には武漢に向かうという計画です。ところが親父は、6月11日、大別山山系舒城梅心駅付近の戦闘で手投げ弾により右足大腿部貫通銃創を負いました。そして病院船で帰国することになるわけです。

3、父との戦争責任をめぐる対話について

そこで、父との戦争責任をめぐる対話についてお話しします。

私が小さい頃から親父は戦争のことを具体的にいろいろ話してくれました。ですから、「1942年（昭和17年）頃には、もうそこで戦争を止めておけばよかったのだが」とか、「パイヤ・マンゴー・バナナ…」とかいう歌がありますが、あれは南方に行った時においしかったとか、私が小学校1年生位の時に、顔面の負傷の後遺症手術で入院してお見舞いにバナナをもらった時、これが親父の言っていたバナナかと思っておいしく食べたとい

う記憶があります。ただ、60年代初め、少年サンデーだとかマガジンとか、そういう雑誌には「紫電改のタカ」「O戦太郎」とか戦記物がどんどん出始めまして、それが大好きでしたので、軍国少年とまではいきませんがよく読みました。またラジオのリクエスト番組で軍歌をリクエストしたこともあります。中学生の時にテレビで「コンバット」が始まりました。ところが、それを見ていると親父が「こぎゃんとは見るな！」と激怒するのです。「これは本当の戦争じゃなか！」「こぎゃんして主人公だけが生き残るってあるもんか！」「これを見て戦争と思うな」と言われて、家ではコンバットを見ることは禁止でした。

実は同じようなことを言われた方がいました。みなさん「原爆の火」というのをご存じかもしれませんが、広島から原爆の時の残り火を懐炉に入れて持ち帰って、家でそれを燃やし続けていたという、福岡県八女郡星野村（現八女市）の山本達雄さんという人がいます。山本さんの次男山本拓道さんが、今年の夏、被爆二世三世の集会で講演されたのですが、いろいろ親父と似ているようなので、講演の後、お話しした時、「実は家はコンバットを見ることができなかつた」と言ったら、「うちもそうよ。親父は絶対コンバットを見させんかつた」と言われました。山本さんのところは、他にもいっぱい見てはいけない戦争物があったそうです。この山本さんもうちの親父と同じ1915年（大正4年）生まれなのです。そして3回戦争に行っているのです。

高校時代ですが、日本史では明治維新あたりまでで一番大事な現代史まで習いません。世界史の方は先生も進歩的な先生だったので、いろいろ習ったりしたので、日中戦争・太平洋戦争は侵略戦争だったというふうに思いました。そして高校三年生のとき、『アンネの日記』を読んで衝撃を受けました。おれは「アンネに負けた！」とその時思いました。それがきっかけで受験勉強そっちのけで、一年生から三年生まで十数人集まって、毎日生徒会のことや学校の規則のことを議論していたら、生徒指導の先生から目を付けられたので、それをごまかすために一応新聞部というのを作って、顧問の先生も決めたら、毎日そういう話ができるということになりました。私が卒業した年（1970年）の6月に新聞部の後輩達を中心になって菊池高校始まって以来の生徒総会を開いて、生徒会の規則の改革をやったりしました。

1970年熊本大学法文学部に入学しました。全共闘運動はほとんど下火でしたけれども、先輩達があれだけ闘ったあの全共闘運動とはなんだったのかと考え、日大の秋田明大さんや東大の山本義隆さんの書いた本を読み、あるいは九大の滝沢克己という哲学の教授の書いた本に夢中になったりしました。自分の立脚点探しだったと思います。そのうち学生運動に参加し、72年沖縄返還協定に反対するデモで東京で逮捕され、起訴されました。その時、東京の拘置所から父宛に「あなたが参加した戦争は侵略戦争ではないか？」と手紙を書きました。それが、こういう問題に関する親父への初めての手紙です。実はその前、どうしても世界旅行に行きたかったから、一時水島コンビナートに三ヶ月ほど行って、金貯めて、ヘルシンキまでの切符も手配したのですが、仲間から「あんたデラシネ（根無し草）で行ってどうするの」と言われて、「そうか」と思ってそれを取りやめて、それがこの時の保釈金になりましたけれど。

そうして、10年間に及ぶ父との戦争責任対話が始まります。このころ1970年の「7・7華青闘告発」があって、当時の学生運動、新左翼が「あなた方が本当に帝国主義抑圧民族だということを自覚しているのか」と突きつけられ、問われたと思います。そこから本多勝一著『中国の旅』をすぐに読み、「日本軍が何をやったのか」ということが書かれていますので、その事を父にぶっつけるということを執拗に繰り返しました。そうすると父は答えきれません。当然です。日本兵は絶対上官の命令に従うだけで、部隊がどこでどんな酷いことをやったか知らないわけだし、父も答えられずに黙り込む。あるいは「俺はそげなどはしとらん」と否定する。それを続けていっていたら、最後には「自分が戦った戦争を侵略だと認めると、自分の人生を全否定することになる。俺はそれが怖くてできん」と本音をもらしました。それでこんなかたちで追い詰めたらダメだなあと痛感しました。

そのころ、私は部落解放研究会に所属して被差別部落の子ども会の学習会に参加していました。その部落解放運動、同和教育のなかに、「語り運動」というのがありますが、たとえば、親に対してちょっと問題意識を持った子が、飲んだくれで仕事もしない親に対して、親を責めるのじゃなくて、何でそんなふうになったのかというのを親の内面に入って行って対話をしていくという、そんななかで、親子で部落差別が根底にあるということを見据えて闘っていけるようになる、というような事例を知りました。そのときに、「ああそうか、俺もそういうことを親に対して全然やってなかったな」と反省しました。それから、私も父の内面に入り込むような対話に切り替え、「若い頃どうだったのか」とか、親の生き様に迫り「あんたもきつかったんだろう」とか少し励ましながら、話を進めました。

そうしたら、親父がいろいろ語り出しました。一番驚いたのは、親父が、青年時代プロレタリア文学の愛読者だったということです。その当時ナップという全日本無産者芸術連盟がありましたが、その機関誌『戦旗』を購読していたのです。そこに載った主要な作品を親父は読んでいたのです。また、29年恐慌から当時農業恐慌がすごくて、家も蚕を飼っていましたが、繭の値段が三分の一、米価が二分の一位まで落ち込んだので、父はそれに対して、何をしたかという、左翼の人たちが九州の山の中までオルグに来るわけではないのですが、1935年（昭和10年）かその前位に、菊池神社の初詣の時にピラ配りにいったというのです。その内容は、詳しくはわかりません。一時は、松岡洋右が、議員を辞めてからファシズム運動をやるのに近寄ったりもしています。「俺は警察が来る前に逃げて帰ったもんね」というのです。「なんだ。あんた俺とあんまり違わんね」と親子で共感しました。

それで1936年1月、徴兵検査を受けて入隊する時に、2日間憲兵から「お前はアカじゃないか」と相当厳しい取り調べを受けたのですが、最後は大声で「私は天皇陛下の赤子であります」「私は天皇陛下に命を捧げる決意であります」と言ったら憲兵が許してくれたということです。親父は農民で高等小学校（今の中学校）までしか学校は行っていませんけれども、何らかの問題意識をもった兵士ではあったらろうと思います。ですから、中国人の朋友も作るし、復員してからもその写真を大切にアルバムに残していましたから、そういう意識も一方にあったまま戦場にいることの思いというのを考えます。

私は、父との話の一方で、70年代中頃「中帰連」（中国帰還者連絡会）の存在を知りました。中帰連が出しているパンフレットを手に入れて、その時にも「目が覚めた」気になりました。これは、自分がちゃんと話をしたら、ひょっとしたら、親父が侵略戦争だと認めるのではないか、「認罪」を引き出せるのではないか、という希望をもちました。しかし、それを運動圏のなかにいる戦争経験者の方に話しても、「あの時代は仕方が無かったんだ」とか「親を責めたらいかんよ」「厳しすぎる」とかいろいろ言われました。でもあきらめず、「責任はありますよ」という話をしました。この中帰連の数年間に及ぶ認罪活動、周恩来、中国政府のねばり強い人道主義に応えた日本軍兵士がいた事に驚きました。ただ、これと同じ事は親子でできるものではないと思いますが、当時の私の力量では、父の「認罪」を引き出すことは限界があると思いき、約10年の戦争責任対話を締めくくるに当たり、「あなたの戦争責任を私も一緒に背負っていく」というと、父は大きく頷きました。戦後50年の1995年頃父は私に日誌を手渡しました。これは父も戦後50年ということをも自分自覚して、父なりのけじめの付け方だったのではとど思います。ということは、それが私の手によってどのように扱われるかは当然自覚してのことです。

その年、アメリカのある退役軍人、高級軍人でしょうが、「広島原爆は慈悲で落としたのだ」と言ったという記事が出たことに関して、親父が激怒して川柳で“原爆を慈悲で投下となにをいう”と書きました。そうしたら、それが、地元の熊本日日新聞文芸欄の川柳部門で1995年の年間最優秀作品ということになったのです。ですから、親父の葬式(2006年5月)の時には、他の熊日の文芸欄を飾った肥後狂句や短歌も並べましたが、とりわけそれをでかかど飾り“文芸葬”にしました。

翌年(1996年)300通の父宛の戦時中の手紙を父は私に手渡しました。

4. 戦争責任を一緒に背負う生き方を求めて

<戦争する国作りとの闘い> — 「二度と戦争してはいけない」を受け継ぐ—
とにかく、「戦争をしてはいかん」ということです。

いまの状況を見て、親父が何と言うだろうかと思いますが、1992年カンボジアPKO派兵のときには、1991年「自衛隊の海外派兵に反対する熊本市民フォーラム」を結成しました。お坊さん達も参加して、自衛隊官舎への6回のチラシ配布をしました。お坊さん達がなかなか帰ってこないのどうしたのかと思っていましたら、一軒一軒訪ねて、ドアを開けて説教するので時間がかかったとのことでした。第8師団のゴラン高原PKO派兵(1997年)の時は、朝6時過ぎから陸自第8師団正門前に行ったら、ちょうど送別会を終えてバスに乗って出発するところだったので、バスを止めて抗議しました。

小泉政権の自衛隊イラク派兵に反対して熊本地裁へ差し止め提訴し、この時は、事務局長を引き受けました。2004年秋、自衛隊イラク派兵違憲訴訟150名で原告団結成。2005年3月熊本地裁へ提訴。今沖縄におられる小林武さんの「平和的生存権」の証言は高い評価を受けました。2008年3月一審敗訴でしたが、直ちに福岡高裁へ控訴し、「一発結審」の可能性が出てきたことから、同年8月に熊本から車で行って福岡高裁前で1週間毎日座り込

みを続けました。

そして、2008年4月名古屋高裁で歴史的違憲判決を勝ち取り、12月末自衛隊撤収が決まりましたので、札幌と熊本の裁判はどちらかが負けると、この名古屋判決が無効になるので12月25日熊本と札幌で控訴を取り下げ、名古屋高裁判決は確定しました。それ以降も、改憲・戦争法との闘いを続けてきました。

<歴史修正主義との闘い>

そして歴史修正主義との闘いです。

①教科書ネットくまもとの結成

1996年自民党や右派勢力が「中学教科書から慰安婦記述を削除せよ」というキャンペーンが開始されましたので、教組や退職教師、市民が熊本市議会、県議会への右派の請願と闘いました。96年12月議会で熊本市議会では請願が不採択となりましたが、県議会では継続審議となりましたので、3月県議会の時、熊本県の姉妹都市である韓国忠清南道の市民団体との連携で、韓国から代表団が来たりして、6月議会で請願取り下げに追い込みました。この時国際連帯の力の強いのを実感しました。

2001年教科書ネットくまもと結成。忠清南道から訪問団来熊、県内で要請活動。それ以降2005年、2009年、2011年、2015年、2019年と教科書採択で忠清南道市民と連帯し、全市町村を回ったりして、何とか今のところ「つくる会」教科書を不採択にしています。事務局長を2006年以降続けています。この延長で日韓交流を進めてきました。

②日韓交流

教科書問題から忠清南道にある韓国独立記念館を訪問し歴史学習を積み重ねてきました。2007年から2011年まで、「独立記念館歴史研修ツアー」を5年間開催してきました。熊本を中心に訪問団を募り、多いときには20数名位の参加があり、独立記念館での学習をしました。韓国の方からの話を聞くというだけではなく、熊本からも、戦前の朝鮮侵略と植民地支配へどのような関わり方をしたか、その加担の歴史についても意見発表しました。

特徴的には明星皇后・閔妃殺害事件実行犯48名のうち21名が熊本の間人なので、その関係者子孫を含めた謝罪の訪韓ツアーを組みました。これは現在まで続いています。

当時の熊本県は県として独自に朝鮮学生派遣事業というのを日清戦争の翌年から1903年か4年まで続けています。それは、優秀な子たちを3年間ぐらい朝鮮に送り込んで朝鮮の言葉から国内事情などの学習させるというものですが、このなかに私の地元菊池出身の園木末喜という人物がいます。彼は、安重根が伊藤博文を射殺して逮捕された翌日から死刑までの間の通訳をした人ですが、安重根はこの園木末喜に宛てて2幅の遺墨を送っています。

一つは、「日韓交誼善作紹介」日韓の友好のためにはお互いよく知り合うことだ、もう一つは「通情明白光照世界」情が通じ合えば光は世界を照らす、です。私はこれはただ園木末喜に宛てたものではなく、日本人に与えたメッセージだと考えています。毎年、宗教者

などを含めて他県からも幅広く参加を募り、ナヌムの家訪問や江華島を回ったりなどのフィールドワークを含めて実現してきました。

忠南とは教科書問題だけでなく日韓で共通にかかえる諸課題(環境問題、全教組と熊本高教組、農民運動等) 幅広い交流を開始しました。2019年11月には「熊本県民のメッセージ」を持って、私と内田敬介氏(農民運動研究者)が忠南訪問、最悪の日韓関係を民間交流活性化で打ち破る確認をしました。

父の日記に書かれている慰安所への関わりから、1991年の金学順さんの証言が行われた8月14日を国際的な記念日にすることにした「慰安婦問題」国際会議(2013年8月13日開催)へも参加し、その時にいろんな取材を受けました。2014年韓国MBCが取材に訪れ制作した「父の日記」が2014年3.1節で全国放映されました。父の日記は独立記念館へ2014年に寄贈しました。

③中国との交流

中国との交流については、熊本の「平和人権フォーラム」という団体が90年代から生存者を招いてお話を聞くという活動をずっと続けておられますので、いっしょに活動してきました。また2014年「人民日報」の取材を受け、2014年4月24日号に一面を使って報道してくれました。「反ファシズム解放戦争70周年」にあたる2015年8月には、人民日報社から依頼をされて「父の日記」を中心にした『一道背負ー日本父子的侵華戦争責任対話』を書きあげ発行しました。これには、盧新寧さんという人民日報社の総副編集局長が高く評価する序文を書いてくれました。現在でも中国で読まれています。

2017年12月南京大虐殺80周年国家公祭へ参加。父の日中戦争時のアルバムから金鶏勳章などの遺品は南京抗日戦争民間博物館へ寄贈しました。南京事件生存者何人もの方ともお会いし、レセプションではジョンラーベの孫トーマスラーベ氏とも会いました(写真)。2019年には、ハルピンの731部隊罪証陳列館へノモンハン事件戦死者からの手紙他を寄贈。2020年12月には南京TV局へビデオメッセージを出しました。

<反差別人権確立の闘い>

部落差別との闘いでは、取材に来られた部落解放同盟狭山事件担当の安田さんも今日は来ておられます。

私は、81年に被差別部落出身の妻と結婚し、以降熊本市内の被差別部落に住んで、部落解放運動に取り組んでいます。今日は娘も来ていますが、娘への部落差別事件とも闘ってきました。2016年熊本地震の後、解体していた部落解放同盟熊本市支部を再建して、支部長としてやっています。ただ、最近、部落差別主義集団「鳥取ループ・示現舎」が、この私達の熊本支部がある被差別部落の5カ所を映像で撮って回って晒したのです。それで大問題になって、まだ支部内で実態調査をしていますが、12月1日になって、この示現舎の「部落を晒す」というこのYouTube動画が、グーグル社の人権規定にそぐわないと

いうことで200何本かが削除されました。ただこの「鳥取グループ・示現舎」は差別動画「部落探訪」事態が禁止対象にならなかったとして「部落探訪は不滅だ」と言って、さらに別のところで晒しまくるということをやっているのです、闘いを続けています。まだ現在進行形です。

もうひとつは、ハンセン病菊池事件に関するものですが、1952年に、私の家から五、六百メートルしか離れていない旧水源村で起きたハンセン病に起因する殺人事件です。まったく無罪であるにもかかわらず、裁判所、検察、弁護人を含めたハンセン病差別によって、死刑にされたFさんは、私の遠い親戚に当たります。この事件の現地調査に来られた方も今日来られています、これは裁判の進め方自体が憲法違反であるとする熊本地裁判決(2020年3月)をうけて、現在菊池事件の国民的再審請求に取り組んでいます。

5, 戦争責任を次の世代に引き継ぐために

<ドイツの「過去の克服」に学ぶ>

最後に、大事なことですが、では戦争責任をどのように次の世代に引き継いでいくのかということについてです。

やはり、これはドイツの「過去の克服」に学ぶことが必要だろうと思います。

みなさんご存じのように、2015年、安倍晋三は「戦後70年談話」で次のように言っています。

「日本では、戦後生まれの世代が、今や、人口の八割を超えています。あの戦争には何ら関わりのない、私たちの子や孫、そしてその先の世代の子どもたちに、謝罪を続ける宿命を背負わせてはなりません。しかし、それでもなお、私たち日本人は、世代を超えて、過去の歴史に真正面から向き合わなければなりません。謙虚な気持ちで、過去を受け継ぎ、未来へと引き渡す責任があります。」

「私たちの親、そのまた親の世代が、戦後の焼け野原、貧しさのどん底の中で、命をつなぐことができた。そして、現在の私たちの世代、さらに次の世代へと、未来をつないでいくことができる。それは、先人たちのたゆまぬ努力と共に、敵として熾烈に戦った、米国、豪州、欧州諸国をはじめ、本当にたくさんの国々から、恩讐を越えて、善意と支援の手が差しのべられたおかげであります。」

「私たちは、二十世紀において、戦時下、多くの女性たちの尊厳や名誉が深く傷つけられた過去を、この胸に刻み続けます。だからこそ、我が国は、そうした女性たちの心に、常に寄り添う国でありたい。」「先人たちのたゆまぬ努力と共に、敵として熾烈に戦った、米国、豪州、欧州諸国をはじめ、本当にたくさんの国々から、恩讐を越えて、善意と支援の手が差しのべられたおかげであります。」

一貫して、過去否定、侵略戦争の否定です。中国、朝鮮、東南アジアを侵略したことは一切でてこないのです。安倍は米英に負けただけだと考えていて、アジアの民衆に負けたとは思わないのです。

「罪」は一人一人の人間の行為です。「罪」の明確な確認によって「責任」の問題を語ることが出来ます。安倍は日本軍が侵略戦争で起こした戦争犯罪という「罪」が最初から存在しなかったとして、「責任」を否定していると思います。

また、2016年8月のオバマ米大統領の広島メッセージもひどいものです。

「71年前の晴れた朝、空から死が降ってきて世界が一変しました。せん光が広がり、火の海がこの町を破壊しました。そして、人類が自分自身を破壊する手段を手に入れたことを示したのです。」

なぜ、私たちはこの場所、広島を訪れるのでしょうか？私たちは、それほど遠くはない過去に、恐ろしいほどの力が解き放たれたことを深く考えるためにここにやってきました。」

「アメリカ」という言葉は一言もありません。ただ、原爆が「空から降ってきたの」でしょうか。日本のメディアはこのおかしさを全然追及せず、「すばらしい。すばらしい」「アメリカの大統領が被爆者に会いに来てくれた」と。理解できません。何が「すばらしい」のでしょうか。そして来年、広島でG7をやったときにまた同じようなパフォーマンスが繰り返されるのでしょうか。

これに対して、ドイツでは、ブランド首相以降、歴代大統領がドイツが侵略した国としてイスラエル・ポーランドなどを訪問し謝罪を続けています。シュタインマイヤー大統領2019年9月1日の演説はこうです。

「ドイツ連邦共和国大統領として、私は皆さんに保証したい。私たちは忘れない、と。心に刻むことを望み、心に刻んでいく、と。私は我が国の歴史によって課せられた責任を引き受けます。私はヴィエルニ空爆の犠牲者達の前で頭を垂れます。ドイツの暴力支配によるポーランド人犠牲者の前で頭を垂れます。そして許しを乞います。」「過去は終わらないのです。反対に、この戦争は遠ざかれば遠ざかるほど、心に刻むことが重要になるのです。武器が静かになるとき、戦争は終わります。しかし、戦争の結果は、何世代にもわたる遺産となるのです。この遺産は痛みにみちた遺産です。私たちドイツ人はこれを受け取り、更に担っていくのです。」「私はドイツの歴史的な罪について許しを乞います。私は私たち（ドイツ人）の責任に終わりが無いことを認めます。」

ドイツの歴史教育は、ナチの過去を持つ国に生まれたものとしての責任を自覚させることだといいます。また被害者の体験を聞くあるいは証言を読むことで後世に伝えることは、当事者が死亡すればだんだん厳しくなります。ドイツでは、追悼施設を作り「犠牲者の痛みを想像する教育」に力を入れています。過去に起きたことの本質をシンボリックな形で展示し、「文化的な記憶」として提示しています。

日本では、政府も東京都もまた裁判所さえも、これと真逆の対応をしています。群馬強制連行追悼碑撤去最高裁判決、関東大震災朝鮮人中国人虐殺慰霊祭への敵対をする東京都、「軍艦島」「佐渡金山」世界遺産登録などなど。

<現在すすめていること>

最後に現在すすめていることを述べて終わりにします。

私にとっては、韓国独立記念館ツアーを続けて、韓国との交流のなかで、歴史認識の共有化ができたのは成功体験だと思っています。教科書ネットをもう20年以上やっていますが、その呼びかけで、熊本の大学生(OBも含む)と韓国の留学生、朝鮮学校OBなどを対象に、日韓の教科書比較をやろうとよびかけています。韓国の中学校歴史教科書をいま翻訳作業中です。また例えば、『「日韓」のもやもやと大学生の私』(大月書店)という本がで

ていますが、非常に好評なようです。この前、狭山闘争の座り込みに来た方がおっしゃったのは、「私は BTS の大ファンですが、私の知っている子どもたちが、この本に興味を持って読み始めている」ということです。教科書ネットだけの力では大したことはやれませんが、しかし、韓国民団、朝鮮総聯、大学教授（日韓含む）、留学生などの協力も得て、若い人たちの自立的な運動を作ろうと、その中心メンバーと話を進めています。韓国の歴史を学んで、そこから「気付き」をして、韓国独立記念館訪問などフィールドワークにも取り組んだり、あるいは長崎の岡まさはる記念館見学などを通して若者が歴史認識をしっかりと持つというチャンスはいろいろあると思います。

熊本では高教組の青木委員長が被爆二世の活動の役員もしている方ですが、長崎の被爆地を見て回り、同時に岡まさはる記念館見学で、加害の勉強もやり、それをきっかけから歴史認識に問題意識をもつということで、高校生平和大使として、被爆の問題を国連に訴える運動に参加する高校生もいます。日韓はわりと簡単に行き来ができますので、それが契機になればいいなと思います。

最後に、私個人としては、この『一道背負』をできるだけ早い機会に日本人向けに書き加えて出版しようと準備中です。

<質疑応答>

——（チャット）ベトナム戦争のソンミ村虐殺事件について、お父さんはどのように反応されましたか。

田中：イラク戦争に関しては話しましたが、ベトナム戦争に関しては記憶が定かではありません。ただ父は「いかんね」という位で明確な意見は述べていません。ただ言いたかったことは「戦争というものは、絶対にしちゃいかん」ということです。そればかりでした。

—— 「日記」の全文の文字起こしはいつでしょうか。

田中：全部、文字に起こしておりますのでのちほど。

—— 11月5日の杭州湾上陸から南京に行くまでのことは今日は割愛されていたと思いますが、「100人斬り」のようなことは聞かれていますでしょうか。

田中：特徴的なことは話しましたが、日記を追いかけて、一つ一つ全部を話すという所まではできませんでした。先ほどの『揚子江が哭いている』では、その過程での証言はいくつかありますが、13連隊の証言は少ない方かもしれません。『熊本兵団戦史』というのがありますが、これは軍の動きだけですから、虐殺のことはほとんど書きません。そのあたりのことは今後の課題にさせてください。

—— 今日はお話をありがとうございました。「中帰連との出会い」というお話がありました。この「中帰連との出会い」が、父親との接し方に大きな影響を与えたと理解してよろしいのでしょうか。

田中：はい、影響を与えています。「中帰連」は、私も会員になっております。中国共産党の「認罪」を導いていく、その粘り強い過程に圧倒されますが、それを当時20台後半だ

った私が、それをするのはとても無理だと思いましたが、基本的には、ただ何をやったかということだけではなくて、そこに人道主義的な対話というような柱になるテーマをきちんともって、やっていかないといけないのだということは分かりました。当時もし中帰連と直接連絡をとってやっていたらもう少し違ったかもしれませんが、何かと忙しくてできませんでした。

—— 戦犯管理事務所で、中国人が、「甘い」「やられたんだから、やり返すべきだ」という声が巻き起こったとき、それに対して、「これは明日の中国のために、寛大にして、必ず人間にして返すんだということがないと中国の明日はないんだ」と言い切って説得した。一つの家族のなかにも同じような歴史があったのだなという、新たな感動を持ちながら、お話しを伺いました。

—— (チャット) ジロースの「戦争を知らない子供たち」についてはどのように思いましたか。

田中：その歌は、私も大学2年生位の時に、ヒットして、私はギターをひくのが大好きで、よく歌いました。ただ、やはり知らないとだめだよ、という実感をもっておりますので、今は、ちょっと無邪気に歌う気にはなれません。

—— お父様と話された当時の方が、戦争の加害責任については、今より共有されていたのではないのでしょうか。72年の映画「戦争と人間」では、大スターが出た映画で、南京大虐殺30万人の被害者数と人類史上最もひどい行為というナレーションがながれていました。今修正主義が出てくるのは、実体験がない人が増えたからではないのでしょうか。

田中：「戦争と人間」の時代と今日の違いについてですが、いずれにしても、侵略戦争であるか侵略戦争でないか、認めるか認めないか別にして、自民党でも戦争を経験した政治家がおられた間は今日みたいなデタラメな軍拡みたいなことは無かったと思うのです。戦争を経験した世代の人たちは、やはり「戦争をしてはいけない」、「被害体験も含めて二度と戦争をしてはいけない」という思い、実体験が共通してあって、それがどこかで改憲とか軍備増強とかの「歯止め」としてありました。自民党の政治家のなかでも様々な方が現在でもそのことを言っておられます。その「歯止め」がなくなったということが、今日の大軍拡に至ろうとする、よそで戦争が起きたから、日本は攻められるというような事を言う大きなきっかけになったということは確かにあると思います。

—— 私は熊本出身で、父も第六師団で、砲兵隊か何かで南京にも行っているのですが、私が小学校の時に聞いたのでは、砲兵隊は重い物を運ぶので、道があれば馬に引かせるのだけれども、田んぼなどに入ると思いから人間の力でやるしかなかったということで、すごく大変だったということは言っておりました。日本は弾薬は兵隊が持って行かなくてはならないので、食糧はぜんぜん持ってないので、食糧徴発に行かされたということをおっしゃっていました。実際はその食糧徴発にでかけたついでに、強姦したりだとか、食糧が手に入らないと火をつけたりとか、そういう悪いことをしたのではないかと思います。ただそういうことを聞き出せないまま、私の父は亡くなりましたので、お話しを伺って、上海の記念館に行った時に、見学に来ていた女子中学生らしい人から質問を受けたことがあるの

ですが、その時も「たぶんこちらに来てそういう悪いことをしたと思うんだけど、申し訳ない」ということしか言えなかった。農村に行ったら、そういうことをされたり、火を点けられたりしたひどいことをされた、父からちゃんと聞いておかなかったことが非常に残念です。中国戦線に行った、近所のおじさんからは、慰安所に行った話を、よっぱらって話すのを聞いたことがあります。田中さんのお父さんは三回出征されているというお話ですが、家の父は、中国に行ってそのままインドシナ半島に行かされてシンガポールからインドネシアに行って、最後はラバウルで、オーストラリアで捕虜になりましたが、その間8年間行きっぱなしでした。その間本当に悪いことをしてきたのではないのかと思います。あまり詳しいことは聞いてないのですが、沖縄に行ったときにマンゴーを持って帰ったことがあるのですが、自分は南方に行っている色々な物を食べたけれど、マンゴーが一番好きだったと言っていました。そんなことしか聞いてないです。南方に行ったときはマラリアにかかって、キニーネがあると助かるのだけれど、何も無い、そしたらそのうち回復して、軍医からおまえはたいしたものだといわれたそうです。

田中：今お話を伺っていると、8年間もずっと兵役につくというのは拷問に近いですよ。日本軍は絶対に休暇をとらせない、そういうことをしない軍隊なのです。これが諸外国と違って、強姦や人殺しが発生するなどの一つの大きな原因だと思います。8年はすごいですね。家の親父もマラリアには罹ってその後遺症らしいものが私の小さい頃にはずっとありました。何故か分からないのですが、親父が急に暴れ出すのです。親父が機嫌の悪いときには、子どもはみんなおとなしくして、怒られないようにしていました。何で急に暴れるのか分からないことがよくありました。

—— お父さんのお話のなかで「自分は洗脳されていた」というような自覚があったのでしょうか。若い頃に当時の戦争の影響を受けて、戦争に行き、そうした現実を見て帰ってきて、「洗脳されていた」とか、そんな話はお聞きになっていたのでしょうか。

田中：親の口から「洗脳されていた」という言葉を聞いたことはありません。ただ、父親は戦友会には全然行きませんでした。もちろん傷痍軍人でしたから、傷痍軍人会というのには入っていましたし、1回だけは、球磨郡にいる親父の戦友のところに、家族みんなで朝早く出かけて、日帰りで交流してきたことはあります。それ以外に、何故か分かりませんが、戦友会で憂さ晴らしをするということには行きたがらなかったです。親父はそれなりに中国の朋友との交流を大切にするという精神は失わなかったのではないかと思います。ハイラルで匪賊の処刑というのを見ています。馬に左右の脚をくりつけて馬を走らせる、股裂きの刑にするのです。そういうのを見て、ああいうのは人間のすることではないと怒って話していたのを覚えています。あまり本気で「天皇陛下のために死ぬ」とかいう気持ちではなかったと思います。戦後も「日の丸」の旗を各家庭で掲げましょうという町内の通知がきても、父親は掲げませんでした。父親は何かそこに抵抗感をもっていたと思います。

—— (チャット) 貴重な講演ありがとうございました。コメントです。私は90年代アメリカに留学していたころ、ベトナム戦争従軍経験者の方から、戦争は映画とは違う、人間の脳の髄液が自分の顔にかかるような体験をするのが戦争だという話を聞きました。

——— 韓国独立記念館ツアーのときに、近くの金学順さんや在日の「慰安婦」宋神道さんなどが眠る「望郷の丘」に行かれては。

田中：独立記念館ツアーではなくて、2010年に「慰安婦」国際会議のときに、いろんなところを回り、また金学順さんやみなさんのお墓にお参りました。

——— 「慰安婦」に関係する書類が発見されたというお話しでしたが、それはいまだのようになっているのでしょうか。政府の方に伝わっているのでしょうか。公表されていますか。

田中：藤目さんの本が出たと言うことで、韓国の方にはお伝えしましたし、私の父の日記との関係で裏付けとなる資料だということはお伝えしたいと思いますが、政府の方に要求ということは今は考えていません。公表はされています。この資料はご自由にお使い下さい。

——— 私の親は海軍情報将校で、世界中を回っていたらしいです。ただ、みなさんのお話を聞いていると、お父さんが生きていらっしゃる。私の父親はサイパンで行かなくてもいいのに玉砕しました。私のところに来たのは、桐の箱に入った砂でした。今思いますと亡くなってよかった。みなさんの父親の方はこんなことがあった。家の父親は中国に行かなくてよかった。親父の顔も私は知りません。父親も軍人ですからそんなことをやっていると思う。しかし父親から嫌なことを聞かされなくてよかったという思いもあります。アメリカのアリゾナに行ったときにここで二千人以上が殺されたという話も聞きました。戦争の悲惨な話はあまり聞きたくはありません。しかし、戦争とはそういうことだと思います。戦争を二度とやってはいけないと言う思いでこういう活動に参加しています。

田中：私はドイツがやっているように記憶していくということが大切だと思います。日本の場合は逆でそういうことを無くしていく、群馬でも関東大震災でも軍艦島でも佐渡でも、日本は今「記憶の抹殺」を国を挙げてやっていると思います。記憶することの大切さから始めていかなくてはならないと思います。

以上
